



中世の港町ライを征く



ヒートウェーブのせいで、爽やかな初夏を通り過ぎこのところ真夏日が続いているが、青空が広がり湿気が少ないイギリスの夏はベストシーズンであることに変わりはない。夏休みに向けて家族連れのお出かけや日本から訪ねてきた友人・知人を案内するなど計画がある方も多いと思う。今回は気軽に遠足気分の日帰りできる南イングランドの中世の港町ライ（Rye）を紹介したい。日本からの団体ツアーでは立寄ることはほとんどないが、ロンドンからのアクセスもよく、歴史を感じさせる建物やイギリスらしさがギュッと詰まったお勧めスポットだ。

イーストサセックスにあるライは、中世時代の要塞や教会、石造りの門、チューダー朝の家屋、小石が敷き詰められた小道など歴史の産物がいまま街なかに生き続けていて、散策しているとタイムスリップした感覚になる。昔は街のすぐそばまで来ていた海岸線は長い間に後退し、今では目の前に見ることはできないが、海に関連した通りの名前や港町であった名残があちこちに見られる。

最近注目されているイングリッシュワインの産地も近

近くに複数あるので、途中でワイナリーに立寄るのもよいし、白い岸壁のセブンシスターズへも足を延ばすことも可能だ。ライと組み合わせて南イングランドのハイライトを1日で楽しむこともお勧めしたい。

ライへは、ロンドンセントパンクラスインターナショナル駅からアッシュフォードインターナショナル駅までSoutheastern線で約47分、Southern線に乗り換えて約11分と、計1時間ちょっとで到着する。地方の駅でよく見られるように駅前にはがらんとしていて、お店というと大きなスーパーマーケットくらいしか見当たらない。まずは駅横のCafé des Fleursでコーヒーをいただきながら軽く今日の散策ルートをおさらいをする。ライはぐるっと周るには約1時間ほどという小さな街だが、小道や細い路地を入っていくとたくさんの発見がありじっくり楽しむこともできそう。駅を出て正面左側に公衆トイレもあるのでチェックしておきたい。ライには街全体がイラストで細かく描かれたタウンマップがあり、街なかのお店やカフェなどあちこちで無料で手に入るほか、ダウンロードもできる。<https://ryesussex.uk/pdfs/rye-map.pdf>

*最終ページのダウンロードした地図をご参照ください。



まずは街の南東の端にあるセントメアリー教会を目指す。駅正面の坂道を5分ほど行くとお店が軒を並べるHigh Streetに出る。中ほどにあるレストラン兼ホテルのGeorge In Ryeを右に曲がりLion Streetを進むと、坂道の先に鮮やかな青い文字盤の時計とてっぺんに風向計がついた塔が現れる。



12世紀初めに建造されたセントメアリー教会はライの高台にあって、この時計台は街のあらゆるところから見える。教会内部のステンドグラスや天井の梁など教会の内部もちろん美しいのだが、何といても一番の魅力はこの時計台だろう。上部が展望台になっていてライ全体を見渡すベストスポットと言われている。(入場料4ポンド)

人ひとりがようやく通れる狭い階段を上っていくと途中から木製のはしご状の階段に変わる。手すりが付いているけれど結構急な勾配なので足元を確かめながらゆっくり進む。途中、時計の鐘が収められた階を通過して小さなドアを抜けるとようやく展望台に到着する。360度の視界が目前に広がり、テラコッタの屋根の家並みや緑の丘、緩やかに流れる川、緑地帯のはるか向うには風力発電のタービンなどが一望できる。この時計は1561～62年に据え付けられたというから、海岸線がいまほど後退していない時代にはここから港が見えていた。それを除けばこの時計台の上から見る風景は何百年も前からそのまま変わらないままなのだろう。



時計台からすぐ下、南東方向を流れる川のすぐ横に石造りの丸い塔が組み合わさった建物が見える。これがライ城（イブラタワー）だ。セントメアリー教会の敷地を通り抜け、ライ城に向かう。ライ城



はフランスからの侵攻に備えるためヘンリー3世が1249年に建造した要塞である。15世紀に所有した個人の名前にちなんでイブラタワーと呼ばれている。

15～19世紀には刑務所として使われたというこの建物は今では博物館になっており（入館料5ポンド）、地上2階地下1階の建物には武器や軍服、中世の遺物や地図などが展示されている。テラスからは建造当時は海であった地域が見渡せる。（画像：ライ城4）敷地内にあるこじんまりした美しい庭は、中世時代には食用・医療用のハーブが栽培されていたという。このほかに、後世に作られた女性専用の刑務所やレプリカの砲台が設置されたところなどもあり、時代の変遷とともにこの建物の用途が変わってきた様子がうかがえる。



セントメアリー教会をぐるりと囲むChurch Squareには、ハーフティンバー様式の家屋が多く見られる。これは15～17世紀によく用いられた木造建築の手法で、梁や柱が外部に露出し漆喰などで隙間を埋めて作られている。





イギリスの他の地域にもあるが、ライではここ以外にもあちこちで見られる。少しずつ大きさやデザインが違うのが興味深い。手入れをして昔の外観を保ちながら今も家として、店舗として使われている。



次に、1156年に創業されたというイン（パブ兼宿泊施設）、マーメイド・インを目指す。Church Squareの西側にある石畳の坂道マーメイドストリートにあり、ハーフティンバー様式の建物でマーメイドを象った看板が目印だ。当時の建物は1377年にフランスがライを焼き討ちした際に焼失したが、1420年に再建された。



創業当時の貯蔵庫だけが生き残り、今も地下にあると言われている。マーメイド・インは1730～40年代は密輸業者のたまり場だった。なんでも、有事の際の逃げ道として近くのThe Mint通りにあるオールドベル・インに繋がる秘密の地下通路もあるそうだ。



せっかくなので、歴史を感じる店内か天気の良いこの季節はテラス席でビールやピムスを楽しみたい。



マーメイド・インの前の坂道を下っていくと、海辺の雰囲気のある通りStrandに出る。ここから川沿いの大きな道に出ると公衆トイレもあるので覚えておきたい。

ライの街で見られる特徴のひとつに小さな石が敷き詰められた石畳の道が挙げられる。セントメアリー教会の周りのChurch Squareとそこから西へ延びるWatchbell Street、マーメイド・インのあるMermaid Street、そこから北に続くWest Street、またHigh Streetの東側から北に延びるConduit Hillなどで見られる。





石畳の道や坂道に備えて、散策には歩きやすい靴を履いていくことをお勧めしたい。

このほか、屋号や通りの名前に関連するイラストが描かれたハウスプラーク、ハウスサインと呼ばれる陶製の表札を出している家も多く見かける。手入れされた古い家にチャームな表札がよく似合う。表札に番地があるならまだしも、屋号しか出ていないものも多いので、郵便配達やデリバリーの人にとっては大変なのではないかと心配してしまう。



Strandから続くWish Wardには19世紀初めに創業した有名な陶磁器メーカーRye Potteryがあり、ここで作られた表札も多いのだろう。

さて、街の東側にある古い石造りの門ランドゲートに移動する。度重なるフランスからの侵攻に対抗するためエドワード3世が建造させた城壁と4つの門のうちの一つで1329年頃に建立され、唯一現存しているそうだ。駅からは、Station Approachを直進し、ひとつ目の通りCinque Ports Streetを左（東）に進むと突き当たり右手に出てくる。



城壁の一部はシンクポーツストリートのパーキングに残っている。



まさに中世時代の名残が日常生活に溶け込んでいるといった雰囲気のある街だ。

ここまで見ておきたいハイライトを紹介してきたが、アンティークのショッピングやグルメも楽しめる。ヴィンテージ品や手頃な価格の骨とう品のお店がいくつかあり、特に駅から直進し一ツ目のCinque Ports Streetの西側やHigh Streetの西側に続くThe Mint通りにあるお店はふらりと入りやすく、かわいいものやお気に入りのものが見つかるかもしれない。



飲食店はHigh Street、Cinque Ports Street、Tower Street、セントメアリー教会に続くLion Streetに多く集まっているのでこの辺りに来れば困らない。個人的には、Tower StreetのフィッシュレストランWebb's Fish Bar、The Mint通りのMarino's Fish and Chips、The Mint通りを少し入ったCobbles Tea Roomなどがお勧めだ。





古いパブであれば前述のマーメイド・インやオールドベル・インもいい。

ライで半日散策を楽しんだら、南西60kmのところにあるバーリングギャップ（Birling Gap）に行くのもお勧めだ。バーリングギャップの展望台から眺めると、石灰岩でできた白い岸壁が続く様子がよく見える。海岸にも下りることができ、間近で見ることも可能だ。車ならライから1時間ちょっとで行けるので、古い歴史が今も生き続ける街と大自然が作り上げたダイナミックな風景を両方楽しめる。



日本クラブ会員様への特別割引もございますので、こちらのリンクも是非ご覧ください。

また、イーストサセックス州はワイナリーがたくさんある。ぶどうの栽培に適した土壌と気候変動による温暖化のせいで、ワイン生産に適したこの地のワインにはこのところ定評がある。車の運転に支障がないようであればワイナリーに立寄るのはいかがだろう。広大なワイン畑の散策と試飲を組み合わせたツアーもあれば、自由に散策できるところもある。試飲でお気に入りのワインを見つけてお土産に買って帰るのも最高だ。スパークリングワインで受賞している Gusbourne (<https://www.gusbourne.com/>)、オーガニック栽培にこだわりのある Oxney (<https://oxneyestate.com/>) はお勧めである。



ワイナリー（イメージ） Flickr user: John Athayde Yorktown
<https://www.flickr.com/people/boboroshi/>, CC BY 2.0 via Wikimedia Commons

JTB Europe Ltd. Mybus UK 北出泉子

